

# 校長会広報218号

発行・一般財団法人 宮崎県校長会館  
編集・宮崎県校長会  
広報委員会



## 「里々を守り抜く力を身に付けさせたい！」

高千穂町教育委員会 教育長 戸敷 二郎

本職に就いて1年余りが過ぎた。旧6ヶ村の集合体であるこの高千穂町には、採用前の講師として高千穂高校に3年、教諭として高千穂中に5年、教頭として上野中に3年、校長として岩戸中に2年、高千穂中に2年の通算15年の勤務経歴があり、教諭時代に町内に建てた自宅が22年目を迎えている。勤務する役場を含め町内には50代から20代までの各世代に教え子たちが多数おり、当時の保護者の方々も含め地元出身でもない私を地元扱いしてもらい、一緒に町づくりに取り組んでいることに幸せと感謝を感じている。

教職生活の半分以上を過ごした高千穂・西臼杵地区は、古くから地域と学校が密接につながっていて、その恩恵を身近に感じながら過ごしてきた。子どもたちも同様に、事あるたびに「地域に恩返しをしたい。」「地域に貢献できる人になりたい。」という言葉が文字にしたり、口にしたりしながら感謝の気持ちを伝えてきてくれている。現職校長の時、この言葉を寄せてくれる生徒たちに対して、「ありがとう。その気持ちを大事に毎日を頑張ってもらいたい。しかし、力のない人は地域への恩返しも貢献も難しいよ。」

「だから今、みんなで協力・協働してその力を付けよう。そのための場所が学校だよ。」と伝えてきた。

では、その『力』とはどんな力か？そこを具体的にいかみ砕いて伝えなければならない。学力だけ？いや、体力、気力、根気強さ、粘り強さ、人とのコミュニケーション力、人にわかりやすく伝える説明能力、立場の弱い人を支えきる力、想像する力など、身に付けておかなければならない力はまだまだたくさんある。

地域に恩返しをする力、貢献をする力とは、その社会を維持したり必要に応じて変えていったりすることができる力と考えられる。ある識者は、この

力を「社会力」と呼んでいる。その著書の中で「社会力とは、よかれと思う社会を構想し、それを作り、運営し、その社会をさらにいいものに変えていく力である。」と定義している。一般的に使われる「社会性」が、既にある社会に個人として適応する側面に重きを置いた概念であることに対応した造語であると補足されている。「先生、何のために学校に通ったり勉強したりするの？」という問いに対して、「社会力をみんなで身に付けるためだよ。そのために先生や友だち、地域の人たちが居るんだよ。」と返してきた。

人口減少、超高齢化、過疎化、空き家の増加、労働力不足等々、中山間地域は社会問題の先進地帯である。この地域に恩返しをしたいと考える子どもたちには、正解のないこれらの課題に向き合い、解決の方向に導いていける力を身に付けさせなければならないと考えている。そのためには、校長をリーダーとする各学校や地域のさまざまなコミュニティが連携しながら戦略を描き、町づくり・人づくりを進めていかなければならない。

教育委員会としては学校統廃合の課題や郡内唯一の県立高校である高千穂高等学校の活性化への参画など、急ぎ対応しなければならない課題も山積しているが、逆転の発想でピンチをチャンスにと捉え、このサイズの町だからこそ実践できる一貫した教育の実現にチャレンジしていきたい。この春、中教審がとりまとめた「幼保小架け橋プログラム」が届いた。これを手がかりに0歳から18歳までの学びの連続性を見直す中で、社会力の育成を柱として失敗を恐れず試行錯誤を続けていきたいと思っている。

この晩秋には、コロナ前のように里々に夜神楽の調べが戻ってくることを願いながら…。

※引用書籍:「子どもの社会力」門脇厚司著 岩波新書

## ふるさとを誇りに

綾町立綾中学校 藤本 敦

新型コロナウイルスの感染状況がなかなか好転しない中、今の世の中の流れは、絶対感染を広げないことではなく、可能な限りの予防策を取った上で日常生活を送る段階に入ったように思う。本校でも可能な限りの予防策を講じながら授業や行事、部活動等を実施しているが、通常教育活動に戻すまでにはまだまだ時間がかかりそうである。

綾町の子どもたちは、中学校卒業後は町外の高校に進学していく。その後は町外もしくは県外に就職、進学する者がほとんどである。そこで出会った人たちに、自分が育った綾町を「誇る」ことができる体験をさせたい、そんな思いで2年間実施できなかった綾<sup>あやびと</sup>人体験学習（職場体験学習）を5月に実施した。新型コロナウイルスの感染が収束しない中、無理をお願いした事業所は、自然生態系農業（有機農業）に取り組む複数の農園である。生徒は生産者が自然生態系農業にける思いや工夫、苦労や喜びについて話を聞いた上で、ジャガイモやタマネギ、ニンジ

ンの収穫、ゴボウの苗の間引きなどを体験した。

私は、高校卒業後に県外の大学に進学した。同じ学科に入学した同級生は、ほとんどが大学所在地以外からの入学生であった。歓迎してくれた先輩方も同様である。そして、入学後すぐの学科やサークルの仲間うちで始まるのが「うちの学校は、俺の町は・・・。」といったお国自慢、ふるさと自慢である。町を挙げて取り組んでいる自然生態系農業について知り、体験することは、こんな場面でふるさとの綾町の「誇る、自慢できる」ことにつながると思っている。

綾町で生産されたオーガニック野菜は、関東や関西といった大都市で人気と聞く。私は、就職先や進学先の大手スーパー等で綾町産のオーガニック野菜を見かけた時、ふるさと綾を思いながら同僚や同級生に自慢する卒業生の姿を思い描いている。そして、綾中学校の綾人体験学習で自然生態系農業を体験したことも。

## 我が人生の師、T先生との出会い

日南市立日南東郷小中学校 吉永 力

T先生との初めての出会いは、長女の名付け親の依頼をした時であった。T先生は全国各地を回られて講演をされており、二度めにお目にかかったのは、地元宮崎市で開催された講演会であった。講話でT先生から「感謝という字が書けますか?」「感謝という言葉の意味を知っていますか?」「あなたは実際に感謝していますか?」と矢継ぎ早に聞かれたことがある。突然の質問に即答できない私に向かって、T先生は「当たり前であることが、どれほど有り難いことか考えたことがありますか? 今日ここに来るまでに、事故にも遭わず無事にたどり着けたこと。今、仕事があること。何不自由なく三度の食事をいただけること。病気や怪我なく毎日を健康に過ごすことができること。毎日起こる一つ一つの出来事に、あなたはどれほど感謝できていますか? まずは心で思うことが何よりも大事です。次に言葉に出して自分の思いを相手に伝えることも大

事です。そして感謝の思いや言葉を最終的には行動で表すことがとても大切なんです。」とおっしゃった。これまで、「感謝しているつもり」で生きてきたことを、とても恥ずかしく思ったのを今でもはっきりと覚えている。「感謝する」ことの本当の意味を、初めて分かっていただいたような気がした。と同時に、この方こそ「我が人生の師」であると実感した瞬間でもあった。こののちT先生の講演を何度も拝聴し、多くの大事を学ばせていただいたが、その後の教育実践において大きな影響を及ぼすこととなったのは言うまでもない。T先生は11年前に他界されたが、あの時の出会いがあるから、今の私があるといっても過言ではない。コロナ禍でなかなかできなかった十年祭の法事が7月に計画されている。我が人生の師を偲びつつ、残された8か月という期間、初心に戻ってT先生の遺志を子どもたちに伝えられたらと思っている。

# 150年の時を思う

串間市立福島小学校 長 倉 修

福島小の2年目を迎えた。2年目の始まりの時には、何か荒波に一人投げ出されたような、いよいよ自分の力が真に試される時だと感じた。

振り返れば、1年目は尊敬する先輩校長先生が英知を結集して作成された学校経営に関するさまざまな構想と校内人事のもとに、学校運営を進めていった。ところが、2年目となると、学校運営を進めていく素地となる基本構想や校内人事も自らが築いたものである。だから、変な話「逃げ場」がなくなったことになる。まさに正念場である。

福島小学校は、本年度、創立150周年を迎える伝統校である。沿革史によれば、昭和41年2月に創立記念日審議会が開催され、多数の審議委員による審議により、創立の年は学制頒布の年である明治5年(1872年)、開校記念日は現在地に学校が設置され開校した11月7日と決定されたと記録されている。また、本校運動場にそびえ立つ市天然記念物の巨大なクスノキも、調べてみると推定樹齢150年だそうである。クスノキを真下から見上げ

ると、広大な空一面に無数の枝や葉を茂らせていて私の視界の全てを制する。その光景はいつ見ても実に見事であり、150年の時の重みを痛感する。このクスノキとともに、さまざまな時代背景のもとに、多くの人材を輩出してきた本校は、まさに、地域のシンボル、地域の誇りでもある。このことは、きっとこの先もそうあり続けるのだろう。

私の教師人生は本年度で31年目。校長としてはわずか2年目。福島小学校という長い長い物語の中のわずか数ページを担当させていただいているにすぎない。しかし、自分の目線を大切にしながら40名の素晴らしい本校スタッフとともに、日々丸くなって子どもたちのために微力ながらも精いっぱい力を尽くしていくこと。その役割を担えることに幸せを感じながら、改めて気持ちを引き締める毎日である。



支 会 だ り

## < 宮 崎 支 会 >

宮崎市立那珂小学校 村 井 博 明

宮崎支会小学校長会は、宮崎市立小学校47校、宮崎大学教育学部附属小学校1校、国富町4校及び綾町1校の計53校で構成されている。県校長会の活動方針のもと、県校長会研究主題、喫緊の教育的課題の解決や教育施策の具現化等について、テーマを定めて研究を行ったり、その時々学校現場が抱える諸問題について協議を行ったりしている。

本年度開始直後から新型コロナウイルス感染症の拡大があり、各学校ではその対応に苦慮する日々だったが、支会校長会で各校の対応について情報交換する時間を設定したことにより、会員からは「校長会での情報共有のおかげで、対応の方向性や具体的な方策などについて適切な判断ができ、大変助かっている」といった声が聴かれている。今後予定されている水泳学習や運動会、修学旅行、宿泊学習、参観日等の実施についても、校長会における情報交換が各学校の運営によりよく反映されていくものと考えられる。

昨年度はコロナへの対応に加え、一人一台タブレット端末の活用や統合型校務支援システムC4thへの対応も大きな話題となった。学校現場でもいろいろな試行錯誤が続いたが、関係機関との連携により、タブレット活用の浸透やC4thの年度移行もスムーズに進んでいるようである。

こうした中でも本筋の研究活動は継続的に進められている。地域ごとに12~14名で構成する4グループに分かれて「豊かな人間性・健やかな体」「自立と共生、社会との連携・協働」「研究・研修」「学校安全・危機対応」の課題を基に主題を設定し、毎回熱心な研究協議が展開されている。本年度の県校長研究大会や九小協長崎大会での発表を通して、各課題の解決に向けた取組について議論が深まることを期待している。





## < 日南支会 >

日南市立吾田東小学校 平山 十四郎

日南市では、明治時代を代表する外交官「小村寿太郎」の命日を「振徳教育の日」とし、各学校でふるさと日南を学ぶ学習を展開するなど「人づくりこそがまちづくり」という考えのもと、新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を身に付けた子どもの育成に取り組んでおり、本支会は、小学校15校、中学校9校、計24校（小中一貫校3校を含む）で構成されている。

本支会の目的は、「日南市立小中学校の校長相互の連絡調整を図り、円滑な学校運営及び特色ある学校づくりを推進するとともに、研究活動を通して、校長として識見と資質の向上を図る」として、年間7回の定例会を実施している。

会では、前半に小中合同の全体会、後半は小中別の研修会を行っている。小中別の研修会では、小中

一貫校の校長は中学校部会に入り、さらに串間市立串間中学校の校長も参加している。会場は、日南市の生涯学習センター等である。

本年度は、8名の転入者が加わり、経験豊富なベテランから、フレッシュな校長まで合計21名でスタートした。

毎回、県校長会理事会報告として、会長から国や県の教育に関する動向等の話があり、その後に各専門委員会の報告、そして、ざっくばらんな小中別の研修会が行われ、学校運営上の課題解決の一助となっている。

学校の抱える課題は多岐にわたるが、本会では、悩みを語り合ったり、課題について議論したり、情報を共有し合ったりしながら、校長間の連携を更に深めていきたい。

## < 串間支会 >

串間市立北方小学校 津曲 文男

小学校10校と中学校1校の計11校で、少数精鋭の機動力をフルに生かして活動している串間支会である。その中で、本年度も新たに5名の校長が本市各校に転入され、児童生徒も職員も生き生きと活動する学校づくりに尽力する日々を送っている。私は、串間市在任も6年目を迎え、支会長を担うのも「5年目」となった。年数ばかりで内容が伴わず、「ゴメンネ」と言いたくなるが、市全体として取り組んでいることに関しては、そのいきさつや経緯をそれなりに把握しているつもりである。その意味で、市内の校長先生から相談や確認の電話があると、「はい、喜んで」とばかりにお話を聞く。最終的にはその校長の判断となる場合も少なくないが、判断材料を提供するだけでも感謝してもらえることもまた少なくない。校長はとかく孤独感を感じがちである。市校長会の横のつながりを強くして、困った時、愚痴りたくなった時には、いつでも相談できる、い

つでも愚痴れるネットワークを目指したいものである。

さてこの4月、「道の駅くしま」がグランドオープンした。既にプレオープンしていた飲食物産館や情報提供施設に加えて、天候に左右されずイベントを開催できる「屋根付き広場」や、憩いの場や打ち合わせ等のワークスペースなど、さまざまなシチュエーションで利用できる「市民交流施設」などが新たに加わり、文字通りの全面開業である。連休中も串間市民を含め、多くの観光客でにぎわったことは言うまでもない。道の駅に加えて、鹿児島県境にはど近い高松海水浴場に隣接する「高松キャンプ場」も、開業2年目を迎えた。連休中はもちろん、週末になると数多くのテントが立ち並び、大型キャンピングカーも存在感を放っている。「豊かな自然」という言い古された串間のキャッチコピーが、いろいろな仕掛けによって、今新たな輝きを放ち始めている。

### 編集後記

令和4年度も、昨年度までに続きコロナ禍でのスタートとなりました。各学校では、さまざまな感染症対策に取り組みながら、工夫を凝らした教育活動が展開されております。

さて、ここに校長会広報紙218号をお届けいたします。高千穂町教育委員会教育長の戸敷二郎様には、御多用の中、特別に御寄稿いただきありがとうございました。また、宮崎・日南・串間支会の執筆者の皆様方、集約・校正に当たってくださった各支会の広報委員の皆様方にも感謝申し上げます。

本年度も、会員の情報発信・収集とつながりを深める広報紙づくりに取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。